

茨城いのちの電話

つくば（相談電話）
029・855・1000



水戸（相談電話）
029・350・1000



旧土浦中学校本館@土浦・茨城

2019.5.27

2019年7月
第99号

対談：誰もが安心して暮らせる	
社会を目指して	2～4
コラム／受信状況	5
ご支援ありがとうございます	6～7
活動報告	8

旧土浦中学校本館は、ドイツ風のゴシック式建築で明治37年に建てられました。昭和51年に旧中学校としては全国で初めて国の重要文化財指定を受けました。「坂の上の雲」「おひさま」などのドラマや映画の撮影によく使用されています。

連載第1回「誰もが安心して暮らせる社会を目指して」

対談：杉山文野、半田一郎

東京レインボープライド共同代表理事
NPO 法人ハートをつなごう学校代表

杉 山 文 野



杉山文野（すぎやまふみの）さんは1981年に東京都新宿区のとんかつ屋「すずや」の二女として生まれましたが、小さい時から自分の身体に違和感を抱いていました。さまざまな葛藤を経て早稲田大学大学院でジェンダー論を学び、現在は東京レインボープライド共同代表理事、NPO 法人ハートをつなごう学校代表などを務め、社会にLGBT への理解を広げる活動に携わっていらっしゃいます。そんな杉山さんに、茨城いのちの電話の研修などを担当していらっしゃる子育てカウンセリング リソースポート代表の半田一郎カウンセラーがお話を伺いました。今号と次号2回にわたって連載します。

《居場所をつくる》

半田 まず自己紹介から。僕は臨床心理士として、茨城でスクールカウンセラーをしています。電話相談には出ませんが、茨城いのちの電話とは研修の講師として20年ほどお付き合いがあります。今日は広報誌に対談を載せようとうかがいました。

杉山 聞かれて困ることは何もないので（笑）、何でも聞いてください。

半田 もちろん困ることを聞きたいわけではなくて（笑）、杉山さんのお考えやご意見を聞いてみたいと思っています。杉山さんはいろんな活動をされていますが、今一番関心があることは何ですか。

杉山 今一番関心があるのはやはり子供ですかね。生まれたばかりなので。ただ、「いろんな活動をしている」ということに関しては、自分ではそういう感じは持っていません。自分はずっと場所を作ってきたと思っています。いつでもいろんな人たちが垣根を越えて集える場所を、飲食店、パレード、ゴミ拾いなどという形で、地域、社会、国の中に作っているつもりです。子供が生まれた

ということも関連があるんです。精子提供によってパートナーが昨年出産したんですけれど、それは僕たちからすると自然の流れではあったんです。「8年も一緒に暮らしてきて子供も欲しいよね」と言っていたんです。でも生物学的には難しいというのは付き合った当初から分かっていたことなので「養子縁組もいいんだけど、子育ては一緒にしていきたい」と話していた、という経緯があります。実際、子供を持てたら、養子縁組や精子提供についての情報はほとんど表に出ていないんですね。しかも、既存のルールと現実がちぐはぐになっていることが多すぎると感じました。現実の方が進んでいるんですけど、ルールの方が追いついていないんですね。それから、何かしらの形で子供を持って子育てをしているLGBTの人たちも現実にはたくさんいるんです。でも、それをなかなか口に出せないんです。そういう社会だということもあって、情報交換の場もないのが現実です。「（精子提供で授かったなどと言うと）そんなことを言って子供がいじめられたらどうするんだ」と言われてしまうこともあります。そうした現実も含めて、出自に関わらず誰もが安心して子育てができる環境を作りたい、というの自分の中では一番のトピックです。それも場所作りの一つということでしょうかね。

半田 場所作り、ですか。それは杉山さん自身が自分の居場所についていろいろ悩んできたことと関係があるんでしょうか。

杉山 自分自身もそうでしたし、こうした活動をしていると居場所を感じられないという当事者も多いです。セクシュアリティというテーマに関連してというだけでなく、いろんな人たちが集う場所を作りたいと思うのは、いろいろな出会いによって今の自分があると思うからです。

半田 自分は居場所や出会いによって育てられてきた、だからそういう場所を創りたい、というのはとても興味深いですね。

杉山 ただ「暮らせる」ではなく「安心して暮らせる」ということが大事なのですが、たとえばカミングアウトができない大きな理由は、言うことによって相手との関係性や、社会での立場が保てなくなるかもしれないという不安があるからです。でも安心安全が保たれていれば、言うことができると思うんですよ。いろんな人がいるだけじゃなくて、いろんな人たちが安心して暮らせる場所、それも大切にしていることです。

《「言わない自由」「言えない不自由」》

半田 いのちの電話では「聴く」ことをとても大事にしています。人というのは、たとえ現実を変えることができなくても、話せることで支えられ、安心が確認できる気がするんです。カミングアウトの問題では「言えない」ことが当人をとても苦しめているような気がします。

杉山 「言えない」のと「言わない」のでは全く違うと思います。いつでも言えるけれど今は言わない、というのはいいと思うんです。でも言いたいのと言えないのは苦しいですね。例えば、企業からは「相談窓口を作ったが一件も相談がない、意味があったのか」と言われます。でも、窓口があることは実はすごく意味のあることなんです。相談窓口は「言える」場所なのですが、必ずしも「言わなくてもいい」場所ですね。だから、あるだけでも意味があるんです。

半田 杉山さんのような人に言ってもらうことで、企業も「当事者は窓口があるだけで安心でき

る」と理解できるのではないのでしょうか。でも、LGBTの方たちにとって、「言えない苦しさ」はとても大きいように思えます。

杉山 セクシュアリティに関することは、セクシュアリティひとつだけの話ではなくて、すべてに関わってくるんです。当事者にとっては24時間365日の生活の話です。例えば、トランスジェンダーにとってはお手洗いや服装の問題など、すべての生活の場面に関わってきます。また、同性パートナーというのは、そもそも法的にも認められていません。日常生活でもパートナーは異性という前提があって、「どんな異性がタイプなの」という会話が当たり前に出てきます。だからセクシュアリティのところを黙っておくためには、日常会話を避ける必要まで出てきてしまいます。だから、そこだけを黙っておくというわけにはいかないんですね。その一点を言わないことは、すべてを言わないのと同じなんです。

半田 そうですねえ。

杉山 そんな風に、自分の最も根源的なところを隠していると、自分を殺して生きているような感じがするんです。そこが本当に大きな課題ではないかと思います。手がない、足がない、というのは見ればわかります。でも、セクシュアリティは言わない限りわからない。自分から言わないと「いない人」になっちゃうんです。実は、渋谷区の条例の一番大きな功績は、ここを変えたということなのです。これまで「いない」とされていた人たちが「いる」と変わったことだと思っています。黙っている限りは異性愛者しかいないことになってしまうけれど、声を上げることで同性愛者もいる、となるんです。ところで、僕が「トランスジェンダーです」と言うと、「そんなこと、わざわざ言わなくていいじゃない、お前はお前なんだから」と言われる。もし前提条件が「そういう人もいる」というものであれば、僕だってわざわざ会う人会う人に「元女子高生です」なんて言わないと思うんですよ（笑い）。最近は「彼氏や彼女」と言う代わりに「パートナー」という言葉を使おう、となってきました。それは一つの方法ですが、言葉狩りのように一つ一つ消していくことは本質的な課題解決ではないと思っています。僕だって以前は男性に対して「彼女いるんですか」「結婚してるんですか」って当たり前のように聞いていま

したし、それがいけないとは思いませんでした。でも、そういう質問によって居心地が悪くなっている人がいるわけです。けれど、そういう質問に「いやいや、彼女はいないけど彼氏ならいるよ」って当たり前のように言える関係性があれば、「ああ、そうなんですね」で済むんですよ。そのほうが、もっといいことのように思います。だけど「人はみな異性愛者である」という大前提だと、「同性の彼氏（彼女）がいるということは、言うてはいけないこと」になってしまう。その前提条件を突き詰めて考えていくと、法律に行き着くと僕は思っているんです。

半田 ほう、なるほど。

《法制化が社会の理解を広げる》

杉山 法律が変わればすべてが解決されるとは思っていませんが、少なくとも国として「そういう人たちがいる」と、前提条件を変える必要はあると思っています。だって、そういう人たちは渋谷区や世田谷区などのパートナーシップ条例を持つ自治体だけにいるわけではなく、全国、世界中、ありとあらゆる場所、あらゆる世代にいるからです。法律によって最低限の前提条件を変えること、

そして差別禁止法や婚姻の平等などのルールをしっかり作っていくことが何よりも大事だと思っています。政治の話をする、国民の理解が追いついていないと言われますが、鶏と卵みたいな話なんです。理解が追いついてから制度を作っていたら遅いんです。制度を作ることによって理解が進むという面もあるんです。渋谷区がいい例で、2015年に条例ができた時には社会の理解はまだ追いついてなかったと思います。だけどあれがスタートしたことで、認知度が一気に高まりましたよね。現実には困っている人たちがいるんですから、基本的人権という最低限の課題として国がリーダーシップをとるべきだと僕は思っています。でも、政治はなかなか動いてくれないので、まずは民間に働きかけて、と進んでいっています。今ようやく企業や経団連が動き始めて、やっと政治がそこに反応し始めた、という感じですかね。

半田 自分から見えないからといって、存在しないわけではないですね。でも、自分から見えないものは「いないもの」として扱って構わない、といった風潮が蔓延しているのではないのでしょうか。「自分には知らないことがある」と気付かなければいけないことがたくさんあると、お話を聞いて思いました。（次号に続く）



2019年は約20万人もの方にご来場いただき、1万1千人の方がパレードにご参加いただきました！沢山の仲間がいるんだということを改めて実感しました！（写真提供：株式会社ニューキャンバス）

きれいは、きたない死に方

人生でなすべき事したい事は、すべて成し遂げ満足し、いつ死んでも大丈夫という心境で周りの人に感謝し感謝され穏やかに死んでいく：いわゆる大往生ってヤツだ（A型としよう）。そんなんじゃダメだっていうコラムを30年前に読んだ。ほやからこれは二番煎じ、ま二番も百番もよかろう、さ湯になっちまうがな。目から鱗じゃった。曰くに「まだ、やり残したことだらけだ。死にたくないよう、怖いよう、助けてくれー」（B型）つうのがええ死に方だっていうんだ。えっ、どう、納得する？

Aは、一つしかない理想的予定調和的完結的で自由も面白味もない。でBは、人の数だけ多様で未練がましく生への執着があり苦しいからこそ面白いって言うんだなあ。ここには反骨、べきからの解放、開き直り（人生の中で時に巨大な効果を持つ。ダメと思いこんでたもんをもっとダメにならずして、どうするんやとひっくり返す）、死にたくないでもOKというメタレベルの自分がある。大須賀先生の言われる蓮の花の光と陰、鈴木研二先生の言われる相談員は相談者と一緒に泥沼の中にいることが肝心という泥沼モデルにも共通性がある。Aは光のみを好んで陰や泥がない。そんなもん大ならぬ小往生！あるいは、A：仏教の本流的善人の悟り、B：破戒坊主親鸞や一休の悟らんでもいいという悟り、悪人正機説、問題あるこの世界と共にあるため悟りはしない菩薩道みたいな感じかな。さらに一つ型を加えるとA：苦しみのない平和、問題解決指向。B：苦しみはあっても当然とする平和（単に耐え忍べ・戦えという精神論はCになる）、非問題解決指向。C：苦しみはあってはダメなんだという錯乱、苦しみ。自殺者はAはできないからとCになり耐えられずに死ぬというのも多い。いのちの電話が問題解決指向でなく傾聴というのは、相談員がCからBへ道案内するというよりも相談者自らが話す、すなわち歩くうちにCからB世界へ入っていくことを目指しているのかもしれない。同行二人ならば苦しみの世界にも陰の蓮の花が咲く。

横尾忠則・瀬古利彦対談で未完がいい、一番欲しかったものが手に入らないことに魅力があるという話で、モスクワ五輪ボイコットで金メダル取れなくてよかったねと言われた瀬古は、よーしガンバルゾと言って横尾は苦笑い。横尾はB型、瀬古はA or C型のくい違いでしたとき。

かつていのちの電話研修に関わられた僧にしてホスピス医の田中雅博氏の死のドキュメンタリーを見た。ディレクターは多くの人を穏やかな死へ導いた当人は大往生をと期待して製作を進めたが最期はせん妄や苦しみの死となった。みっともない自分をさらしてもよしとするありようが美しい。

ばにゃどんも自分自身この話に全納得できてるわけでもない。んだども、もしできたら生も死ももっと自由になるに違いあんめえぞ。

ケイティ

電話相談員募集

あなたも相談員になりませんか。

電話相談員養成講座の研修参加に関する問合せは、常時受けつけております。事務局へお問い合わせください。

（事務局）つくば TEL 029-852-8505（平日 9 時～17 時）
FAX 029-852-8355
水戸 TEL 029-244-4722（平日 12 時～17 時）
FAX 029-350-1055
ホームページ <http://www.iid.or.jp>

— 受信状況 —

1985 年 6 月 1 日～2019 年 3 月末現在

総受信件数

930,237 件

うち当期受信件数

（2018 年 10 月 1 日～2019 年 3 月末現在）

9,660 件

男 4,517 件 女 5,143 件

フリーダイヤル受信状況

		男（自殺傾向）	女（自殺傾向）	受信件数
2018 年	11 月 10 日	30（8）	19（7）	49（15）
	12 月 10 日	25（8）	23（8）	48（16）
2019 年	1 月 10 日	30（4）	22（3）	52（7）
	2 月 10 日	28（5）	30（9）	58（14）
	3 月 10 日	27（10）	25（4）	52（14）
	4 月 10 日	26（2）	25（2）	51（4）
	5 月 10 日	15（7）	23（6）	38（13）

活動報告 (2018年10月～2019年6月)

公開講座

2018年	12月8日	公開講座Ⅰ 「愛する人を失うということ その再生」 大西秀樹（厚生労働省自殺予防対策補助事業）（水戸市）
2019年	2月9日	公開講座Ⅱ 「つながりあう命 —死刑囚から学んだ生きる尊さ—」 田口ランディ（厚生労働省自殺予防対策補助事業）（土浦市）
	3月30日	公開講座Ⅲ 傾聴ミニ講座 「聴く力を高めるヒント」 半田一郎（守谷市）



後援会活動

2018年	10月10日	卓話（石岡ロータリークラブ）
	10月17日	卓話（土浦中央ロータリークラブ）
	11月7日	卓話（古河中央ロータリークラブ）
	11月11日	前川林業バザー（小美玉市）
	11月19日	卓話（牛久ロータリークラブ）
	11月20日	卓話（龍ヶ崎ライオンズクラブ）
	11月22日	卓話（阿見町教育委員会）
	12月6日	卓話（水戸東ロータリークラブ）
	12月20日	卓話（日立ブーケライオンズクラブ）
	1月16日	理事会
2019年	1月22日	卓話（土浦亀城ライオンズクラブ）
	2月5日	卓話（土浦南ロータリークラブ）
	2月7日	卓話（阿見ロータリークラブ）
	3月13日	幹事代表者会議、合同会議
	5月8日	卓話（日立北ロータリークラブ）
	5月9日	卓話（鹿島ライオンズクラブ）
	5月21日	理事会

理事会、評議員会、運営協議会等

2018年	10月15日	運営協議会
	11月19日	運営協議会
	12月17日	運営協議会
	1月21日	運営協議会
	2月18日	運営協議会
2019年	3月18日	理事会、運営協議会
	3月25日	評議員会
	4月15日	運営協議会
	5月20日	理事会、評議員選任解任委員会、運営協議会
	6月10日	運営協議会
	6月17日	評議員会、理事会

〈編集後記〉

98号の発刊から半年以上が経過してしまいました。この間、広報委員会では広報紙の発行回数とカラー化について検討を続け、結局、諸事情から広報紙を年3回刊から、年2回刊に、全ページモノクロだった表紙、裏表紙をはじめ紙面の一部をカラー化することにしました。今回がカラー化の初号ですので、改善点も多いものと考えており、皆様のご意見を参考にしながら、今後もより良い紙面作りに携わりたいと考えています。

さて、今回は特集「LGBTを知るために」の2回目、当事者の生の声を対談という形で掲載しました。皆様がLGBTへの理解を深める一助となることを願っています。なお、今回の対談に際しては、子育てカウンセリング・リソースサポート半田一郎代表に大変お世話になりました。紙面を借りて感謝申し上げます。（KM）

社会福祉法人

茨城いのちの電話

発行人：幡谷 浩史

編集：茨城いのちの電話広報委員会

表紙絵：岡崎 祐一

事務局：〒305-8691 茨城県筑波学園郵便局私書箱60号

TEL **029-852-8505**

ホームページ：http://www.iid.or.jp

FAX **029-852-8355**

再生紙を使用しています

この広報紙は、共同募金からの配分金で作りました。

